

Title	中國佛典所見のパーニニ
Author(s)	村田, 忠兵衛
Citation	大阪外国語大学学報. 1 p.149-p.160
Issue Date	1952-05-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80091">https://hdl.handle.net/11094/80091</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 中國佛典所見のパーニニ

村 田 忠 兵 衛

## On Panini in Chinese Buddhist Canons

By Chūbee Murata

### S u m m a r y

Pāṇini is known as the most authoritative Sanskrit-grammarian of ancient India, and though he was not a Buddhist but a Brahman, he was of such high renown that his name appears in some old Chinese Buddhist canons, which constitute an interesting source of research materials for the study of Pāṇini.

Pāṇini has been enthusiastically studied by Sanskrit scholars of Europe and America as well as India since the nineteenth century, but Chinese Buddhist canons have seldom been taken up by them as their research materials.

I have selected the theme of this treatise with a view to contributing my share to fill the above-mentioned gap in the study of Pāṇini, and this treatise is a result of my little study based on some Chinese Buddhist canons of the sixth and seventh centuries as materials. The outline is as follows;—

- (1) Early Chinese versions of Buddhist scriptures went no further than merely mentioning Pāṇini's name and the description was but shallow.
- (2) Minuter descriptions about Pāṇini appeared in the works of Yuan Chwang who travelled in India A. D. 629—645 and I-Tsing who travelled in India and Malay archipelago A. D. 671—695.
- (3) The question remains, however, as to whether Yuan Chwang studied Sanskrit by Pāṇini's grammar or not. I examined into the matter and found that he did not necessarily study Sanskrit by Pāṇini's grammar. Rather, my findings prove that the conclusion is most probably negative.
- (4) In spite of the negative conclusion, these records among Chinese Buddhist canons are of considerable significance in that they contribute a new, hitherto-neglected material to the study of Pāṇini.

パー＝の名は、漢譯佛典とか支那選述の佛書の中に「毗耶羯羅那論」とか「聲明記論」「分別記論」「字本論」又は「記論」とかの記述と相伴つて二三散見されるやうであります。私は實は漢譯大藏の方は餘りよく見てをりませんので、その最古の出典については、ハッキリしたことは申し得ません。しかし主として唐代に至つて譯されたもの、もしくは撰述されたものに見られる様であります。

尤も例へば楞伽經の中に（偈頌品南條本 p.366）‘pāṇini(h) śabdanetāram’ にはじまる一偈がございますが、後魏の時代即ち西曆 513 年に菩提流支が譯しました所謂「十卷楞伽」即ち魏譯の總品第十八の二に「波尼ハ聲論ヲ出ス」と譯出して居ります。これが私の見ました範圍では中國に於ける最古の出典であります。更に唐代の實叉難陀譯（B. C. 700年）即ち「七卷楞伽」では同じ箇所は、偈頌品第十の二にございまして「名主ハ聲論ヲ造リ」となつて居ります。魏譯がパー＝を「波尼」と譯したのは偈品ですから、一偈を五字四句にまとめる韻の都合で、語尾の ni を省略したのでありませう。又實叉難陀が「名手」と譯したのは pāṇini と云ふ父系苗字は、その先祖が paṇin と云ふ名をもつてゐた事を示して居りますし、更に paṇin の語根は paṇ であり、この語根には大體二系統の意味がございまして、その一は「賣る、交易する、商賣をする」その二は「尊敬する、賞讃する」の義があり、第二の意味の系統を引いたものと一應は考へられますが、唯單に名手と云ふ漢語は、「すぐれた腕前をもつた人、技藝の達人」の意味ですから、語法學の大家としてのパー＝を、その道の「名手」と釋したと見るのが一番無難なやうであります。〔慧琳音義第三十一卷楞伽の項目（大正藏、五四卷 p.5117）も調べたが、「波尼」は見當りませんでした〕

さて、しかし乍ら、漢譯大藏經の中に、波膩尼の名が餘り數多く見當らないからと申して、印度から中國へ東來した翻經三藏がパー＝の語法論と無縁であつたとは申せません。隋代の眞諦三藏ウジャイニの如き西印度優禪尼國の婆羅門種の出であり、幼少の頃より清貴の家柄にふさはしき立派な教育を受けられ又諸國を遊歴して衆師に就きて學び、内外の學藝に該通してゐたでありますし、又金剛智三藏イーシャーナウアルマンの如きも中天竺の國王伊舍那婆摩ナーランダの第三王子と生れた刹帝利種の名門の出であり、十歳にして那爛陀寺に於て出家し寂靜智に従つて聲明論を學んだのでありますから、尠くとも、眞諦三藏や金剛智三藏がパー＝を知らなかつたと申すことは、たとへ文獻に徴すべきものがないとしても、甚だ危険であります。但しパー＝の名を知つてゐられても、果してパー＝の語法書を直接に學ばれたか注釋を通じてかは、これ又遽かに論じ難い點であります。それはパー＝以外にも別系統の語法書が當時流通してをつたからであります。

パー＝の名なりその語法書を、漢譯大藏經の三藏法師中、最も詳細に紹介されたのは外來の

三藏でなく渡天三藏の玄奘、義淨の兩大家であります。唐代のこの二大三藏以前に、經典や論書に偶々二三、パー＝の名ぐらいが散在してゐるのを發見したとしましても、まとまつた記述はこゝに至つて始めて得らるゝ譯であります。

玄奘三藏のパー＝紹介は西域記卷二に於けるパー＝の生れた場所とパー＝が聲明論を製した由來、及びパー＝の再生歸佛の説話（その中には更に五百羅漢の因縁談が挿入されてゐますが、これはパー＝とは無關係です）及び慈恩傳卷三に於ける記述を、第一に擧ぐべきでありませう。これによつて我々がパー＝が婆羅觀邏邑に生れた事を知り、この婆字が娑字の寫誤であり、従つて「シャラートラ」であり、その實在地點も玄奘が烏鐸迦漢茶城の西北の方行くこと二十餘里（支那式の里程）と指定してくれましたので、十九世紀の中葉フランス翰林院のヴィヴィアン・ド・サン・マルタンがウダカカーンダ（Udakakhaṇḍa）は現在のオーヒンド（Ohind）であり、シャラートウラは北西國境に近いペシャヴァル州のアトック（Peshawar's Attock）の見當であると決めてくれました。委しくはカニングガム將軍の「印度古代地誌」（A. Cunningham, The Ancient Geography of India, 1871, p. 67 etc.）に出てをります。ヨーロッパでは十九世紀の始め頃から、パー＝と云ふ語典家が印度にあつた事を知つてゐましたから、玄奘の西域記が佛譯や英譯によつて紹介されたときにも、それには驚きませんでした。いつ頃の人だか判らなかつたために、一時は玄奘のこの報告も相當典據として持て囃されました。しかし程なく玄奘の記述は年代論の史料としては重んぜられないことになりました。其他のパー＝の生涯に關する事項とか、のちにパー＝の再生した婆羅門の子供が、改宗して佛教に歸依すると云ふ説話は、孰れはカシガ王當時かそれ以降に婆羅門文化の榮えたこの地方で、大乘佛教が熾んになつた餘焰として生れた傳説で、何等歴史的に信據出來ないものだと私は考へてをります。又玄奘三藏が實地にこの婆羅觀邏邑を訪ねたことは、里程や方角まで明記してあるのですから確實で、従つて玄奘が目撃したと云ふパー＝の徳を記念する像設（多分彫像かと想はれるが）が、當時そこにあつた事は事實でありませう。この地方はカンダーラ藝術の盛んな地方でありました。しかし現在では、それらしいものゝ痕迹も發見されてをりません。パー＝の聲明論<sup>ツプサ</sup>が備に千頌ありとする報告も大体正確でありまして、故高楠博士の計算によれば（義淨の寄歸傳英譯 Takakusu: I-tsing, P. 172, note 2.）956 頌に換算出来るさうであります。尤も現在のテキストは偈頌「シュローカ」で書かれてゐる譯ではなく、極度に簡潔なストラ文体であります。

更に、パー＝がその語法書（即ち聲明論）を、自在天<sup>イーシュヴァラ</sup>（即ち濕婆<sup>シヴァ</sup>）の助けによつて造つたと云ふことは、玄奘のみならず義淨も又傳へて居りまして、當時専らかゝる傳説が印度に行はれてゐたものと思はれます。更に慈恩傳にも西域記にも、パー＝の語法書が現はれる以前に帝釋天<sup>インドウ</sup>

の語法書が行はれてゐた。その以前には梵天の語法書が太古悠久の昔からあつたと云ふ事を想像せしめる記述があります。言語が梵天によつて造られたと云ふ傳説は、極めて普遍的で且つ古いものと思はれます。即ち梵天所造の言語と云ふ意味から、我々の所謂「梵語」と云ふ名稱が由來してゐるのであります。慈恩傳卷三には「昔成劫之初梵天先説。具百萬頌。後至住劫之初。帝釋又略爲十萬頌」とあり、パーニニは又これを略して八千頌となした。即ち今印度で行はれてゐるのはこれであると録されてゐる（「八千頌」は寫誤であるか、或はパーニニの<sup>スートラ</sup>パーニニの經篇以外の附屬書<sup>ダーツパーニニ</sup>、<sup>ガナパーニニ</sup>、<sup>ウナールディストラ</sup>、<sup>ブヒツトストラ</sup>、<sup>パーニニニヤシクシャ</sup>即ち語根篇、語彙篇、不規則語彙篇、アクセント篇或はパーニニニ聲音論とかリಂಗアヌシャナナを加へたものを算出したものかもしれません）。西域記の方では「梵天モ<sup>ブラフマン</sup>天帝<sup>インドラ</sup>モ則ヲ作りテ時ニ隨ヒ、異道ノ諸仙モ各々文字ヲ製セリ」と慈恩傳より簡單ですが、「異道の諸仙」まで加へてゐる。「則」をワッターズは「モデルズ」と譯し、更に「文字」を「ヴォカブラリー」と譯してゐますが（T. Watters, On Yuan Chwang's Travell's in India, Part I, p. 221.）、ともかく、梵天、帝釋天、濕婆天と言語或は語法との關係について、この種の傳説が古くから印度に行はれてゐたやうであります。

抑々印度に於ては、アーリヤ人を中心とする言語神聖觀、言語尊崇感、梨俱吠陀以來、明瞭に看取することが出来るのでありまして、リグヴェーダ第十卷に於ける Vāc (X, 71, 1, —11) へ獻げられた讃歌にも、

ブリハस्पテイよ、<sup>ひじり</sup>聖らが  
ものにその名を與へむと  
はじめのことばをなせしとき  
それらのうちに秘められし  
皎潔微妙なるものは  
愛によりてぞ<sup>あか</sup>啓されし  
Bṛihaspate prathamam vāco agram  
Yat prairata nāmadheyam dadhānāḥ  
Yad eshām śrestham yad aripram āsīt  
Preṇa tad eshām nihitam guhāvih.

(Aufrecht's Ausgabe B'd. II. S. 364)

と云ふ如き美しき思想を見るのでありますが、これは言語一般への神聖觀ではなく、吠陀の讃歌、及び祈禱詞の言語がもつ神秘的効用への信仰と密切に結びついたもので、それ故にこそ言語主たる Vāc, Vācaspati への讃美が、祈禱主たる Bṛihaspati, Brahmanaspati への信仰とな

り、更に梵書森林書時代に於ける祭式萬能祈禱萬能の情勢を馴致するとともに、梵(Brahman)至上となり、梵天の言語創造説の確立となつたものと考へます。然らば帝釋天と言語の關係はどうかと申しますと、黒ヤヂニル吠陀派のタイティリーヤ本集(VI, 4, 7, 3)に次の如き説話があります。「言語が<sup>サンヒター</sup>恣<sup>ラーヂュ</sup>の方向に、不明瞭に語られてゐたとき、神々は帝釋天<sup>インドラ</sup>に向つて『我々のためにこの言を分解せよ(vyākuru)』と望んだ。そこで帝釋天は、神々の中央に立ち上つて、言語を分解した。それ故にこの言語は今も尚、音綴を區切つて(即ち vyākṛtā)話されるのである」と。この説話は慈恩傳に云ふ十萬頌の<sup>アインドラウイヤーカラナ</sup>帝釋語法書<sup>アインドラ</sup>についての源流ともなるべき古い文獻的證據としても興味があり、又「語法」の印度的呼稱たる「Vyākaraṇa」への一つの語源論的説話としても面白いものと思ひます(しかし百萬頌とか十萬頌とか云ふのは勿論、誇張した文學的表現でせう)。只パー＝の文典が出現するまでに、より龐大な語法書があつて、その量的負擔のために、學修上困難を來したと云ふ事情は、考へられぬことはありません。それは何故パー＝がかくまで極端に簡潔を重んずる壓縮せられた語法書をつくらねばならなかつたかと云ふ事を反證する一助とも見られませう。更に玄奘の記録を裏打ちする印度の古文獻としてパタンデリのマハーバーシャのはじめの方に次の如き一文があります。“Mahābhāṣya Vol. I. pp. 5—6: Evaṃ hi śrūyate, Brhaspatir Indrāya divyaṃ varśasahasraṃ pratipadoktānāṃ śabdānāṃ śabdapārāyaṇaṃ provaca nāntaṃ jagāma, — Kim punar adyatve yaḥ sarvatha ciraṃ jīvati sa varśataṃ, catur bhiśca prakārair vidyopayuktā bhavaty āgamakālena svādhyāyakālena pravacanakālena vyavahāarakāleneti, tatra cāgama kālenāivāyuh paryupayuktaṃ syāt.”(古傳に曰く、ブリハスパティは天上に於ける千年の間、インドラに正しき諸語の全体を口授せしに、遂に終るの期なかりき——現今に於ては如何にしてかゝる事は可能ならんや。如何に長壽なる人とてもその壽量は百歳なり——[もし前述の如くんば]實に人は全生涯を學習期間に充當せざるべからず)これは一方では西域記に言ふ「學者功ヲ虛シクスルモ、用ヒテ詳カニ究ムル事難シ。人壽百歳ノトキニ波爾尼仙アリ、時ノ澆薄ヲ愍ミテ、浮僞ヲ削リ、繁猥ヲ刪定セント欲ス、——自在天ノ曰ク、我汝ヲ祐クベシト」(略引)とよく符節を合し、前後相補ふ關係をさへ示す。

次にこれはペトリンク譯のパー＝語法書第二版(1837年版)の序文の指示によるのでありますが、西紀後十二世紀前半に成立したと傳へられるソーマデーヴァの譚海(Kāthāsaritsāgara, 4, 20f)の中に、次の如き説話がある「ヴァラルチ語りて曰く、パー＝は婆羅門ヴァルシャの徒弟にして才智乏しき者なりき。彼その業を怠りしかば、師の室は遂に彼を放逐したりき。彼はそれを機縁に飄然悔悟して雪山に入りて禁欲、苦行の朝夕を送りたるが、その殊勝なるを愛でし濕婆神は、萬有の知識の源泉たる新語法を彼に授けたり。それより彼は還り來りて、我(即ちヴァラルチ)に論評を挑みたるに、論評七日を経て、八日目に至りてパー＝は我に論破せられぬ。

そのとき突如濕婆神雲中に影現し、大音聲を放てしかば（我が所依とせる）帝釋語法書（Aindra-vyākaraṇa）は沈黙し遂に滅亡し去りぬ」

爰で更に興味を感ずる點はヴァラルチと云ふのは最も古いプラークリット語法書の作者として、パーニニ同様、印度人の間で神仙的取扱ひを受けてゐるその人と同名であること、又同名であるとするれば、パーニニの梵語語法書とヴァラルチのプラークリット語法書との優劣を示した一つの傳説とも見られますし、又そうでもなくて、現在名のみ傳はつて、實物の存しないインドラゴーマンの語法書と推定することも ウィンテルニッツ の試みてゐる如く（Winternitz Geschichte der Indischen Litteratur B'd. III, S. 398—9. Anm.）可能であります。

さて玄奘は然らばパーニニの語法書を以つて梵語を學んだかどうか、我々の興味を誘ふ問題であります。玄奘は御存じの通り、唐代以前の漢譯佛典の訛謬とか語法的不正確を、意識的にインド原典の正確な翻譯を以つて正さうとした大翻譯家であり、その梵語の知識の優れてゐたことは今更申す迄もないこと乍ら、慈恩傳には玄奘が梵語學の研究をされた那爛陀寺の條では別に特別に語法書の名を指して、どれを以つて學修したと明記して居りません（兼ネテ婆羅門書ヲ學ス印度ノ梵書ヲ名ツゲテ記論トナス、其ノ源ハ始メナク、作者ヲ知ルナシ、毎<sup>ツネ</sup>劫初ニ於テ梵王先ヅ説キテ天人ニ傳授ス、是梵王ノ説クトコロナルヲ以テノ故ニ、梵書ト曰フ（慈恩傳卷三 那爛陀寺之項）。たゞ、西域記第十二卷の末文によれば、玄奘三藏が印度から將來された聲論十三部ありと載せられてゐます。然しこれとてもその題名も内容も今日から遡つて知る由もありません。たゞ折角十三部もの語法書を將來された以上、その中に三藏自身も西域記や慈恩傳の中であれ程くりかへして詳細に興味をもつて紹介してゐられるパーニニの語法書が存在しなかつたと考へるのは少し無理な様な氣がするのであります。しかし將來された事と、學修された事とは自づから別問題である。しかもパーニニは註釋書なくしては印度の婆羅門でさへ理解に差支へる難解難入の書物でありますから、もし學ばれたとしても必ず何らかの註釋を用ひられた筈だと推想されます。玄奘の場合は門下の諸師の述作、就中慈恩大師の選述にかゝるものから或る程度、彷彿されはしないかと一應は考へました。尤も私は先にも申しました如く漢譯佛典や漢文の註疏の類には甚だ不勉強で暗うございます。たゞ古來日本の悉曇學者が屢々引用してをりますところの、慈恩大師撰の「成唯識論掌中樞要」に於ける八轉聲を説示する術語、主格 Nirdeśa、對格 Upadeśana、具格 Karṭṛ-karaṇa、爲格 Sampradānika、從格 Apādāna、屬格 Svāmivacana、於格 Saṃnidhānārtha、呼格 Āmantraṇa 及び男女中三性を例示する Puruṣa, Strī, Napuṃsaka の術語をパーニニのそれと比較いたしますと、八轉聲に於ては主格、對格、屬格、於格に於ては全然一致せず、具格に於て半ば一致する。〔この唯識樞要の格關係の術語と比較的一致す

るのはカーシャパ Kāśyapa のそれである。

- |                    |                         |
|--------------------|-------------------------|
| 1. 主格 Nirdeśa      | 5. 從格 Apādattiḥ (?)     |
| 2. 對格 Upadesaka    | 6. 屬格 Svāmibhāvādiḥ (?) |
| 3. 具格 Kartr-karaṇa | 7. 於格 Samnidhānādi (?)  |
| 4. 爲格 Sampradadika | 8. 呼格 Āmantraṇa         |

カシャパ文典 (Bālāvabodhana) は西紀十二世紀の成立と一般に見做されてはゐるが、元來 Cāndra vyākaraṇa を基礎として出來た綱要書であり、後者はチャンドラゴーミンの作とされ、七世紀の初期の成立と傳へ、佛教徒の文典として有名。パー＝＝のみならずマハーバーシャを參考してゐる。カシュミール、ネパール方面に分布してゐる。[cf. Winternitz, Gesch. d. Ind. Litt. Bd, III. S. 399; Takakusu, I-tsing p. 173 & p. 224.] 偕又パー＝＝では男性名詞の性を示す語は Pums であつて Puruṣa でない。即ち半ば一致を缺いてゐます。一方、同じく慈恩大師の撰した大乘法苑義林章の第一卷に釋義の出で居ります「六合釋」の術語の如きはパー＝＝と完全に合致します。しかし乍らこの場合パー＝＝の術語から借りたか否かは一概に定め難い。と申すのはヤースカとパー＝＝との中間的年代に成立したと推定されてゐる文獻 ブリハド・デーヴァター (Bṛihaddevatā) 第二章第一〇五偈に於ても、

Dvigu-dvandva-avyayibhāvaḥ karmadhārayai va ca pañcamas tu bahuvrīhiḥ  
ṣaṣthas tatpuruṣaḥ smṛtaḥ.

「帶數釋、相違釋、隣近釋、持業釋及び第五には有財釋、第六には依主釋なりと記憶せよかし」

と出てをり、パー＝＝以前から確立してゐた術語で、又パー＝＝以後にも普通に用ひられた術語だからであります。

更に蘇漫多 (格語尾の全稱 Sup, Subanta) 聲、底彥多 (動詞人稱語尾の全稱 Tiñ, Tiñanta) 聲の如きも、玄奘門下の梵學研究に於てはじめてその使用を見る印度語法學の術語であるが、これは印度ではパー＝＝以前に用例のない術語であり、たゞパー＝＝に於ては單に Sup, Tiñ であつて -anta を附した用例を見ない點が相違する。

以上の如き術語としては比較的ポピュラーな性質のものに於ても、パー＝＝と玄奘とは不一致の關係を示してをります。

尙玄奘三藏渡印の大きな目的だと稱せられてゐる「瑜伽師地論」を玄奘譯によつて調べてみましても、佛典に於ける語法思想と云ふものは、形而上學的思辯が主であつて、語法技術的な面を推測する手がかりは餘り得られません。例へば瑜伽師地論卷十五に於いて内明、醫方明、因明、



工巧明と並んで聲明の釋義が見られますが、「聲明處を釋す、六相あり」として、1. 法施設建立相、2. 義施設建立相、3. 補特伽羅施設建立相、4. 時施設建立相、5. 數施設建立相、6. 處所、根裁施設建立相を略述してゐますが、法、義の建立は特に形而上學的思辯による言語の体と、体によつて詮はさるゝ義の範疇の建立であり、補特伽羅は男女中三性と一人稱から三人稱に至る人稱の建立、時は過現未の三時稱を「過去」「過去殊勝」と云ふ如く六時に分立したもの、數は、單數、雙數、複數、處所根裁は處所に五種ありとして、相續、名號、總略、彼益、宣說。根裁は界頌等を名づけて根裁とすと云つてゐる。私は、相續は連聲法、綴字法、名號は語彙、總略は根本となる語法書、彼益はの註疏、宣說は以上の教授解説、根裁は言語の根底としての語根を取扱つたものではないかと考へますが、孰れにしても、佛典中に於ては比較的まとまつた斯の記述からも、我々は具体的な手がかりと云ふものは得られない。顯揚聖教論卷十二や大乘廣百論釋論卷二（玄奘譯）に於ても若干の語法的概念は看られぬでもないが、我々の期待する如き具体的な手がかりは何一つ得られませぬ。同時に玄奘が或は何かパー＝ニ以外の佛教徒の間で流行してゐた特殊な語法書、もしくは語法哲學書に依據してゐたのではないかと云ふ一方の推測の手がかりも、以上のカーシャパ乃至はチャンドラ語法書の箇所を除けば、殆んど得られないのであります。

×

×

×

次に義淨三藏のパー＝ニ紹介であります、玄奘の西域記に比すれば、傳說的要素が尠く、より實質的具体的紹介であります。南海寄歸內法傳の第四卷三十四「西方學法」の一章が、それであり、義淨三藏は、寄歸傳を西紀六九〇年から九二年頃に執筆し、西域求法高僧傳とともに室利佛逝から唐の中宗に獻じた。時に則天武后の長壽元年（西紀六九二年）。即ち前後二十三年に渉る彼の南海印度留學の末期に當り、既に學德ともに完成の域に達した頃の執筆であり、内容も充實しています。

さて南海寄歸傳の第四卷三十四章の西方學法に於てはパー＝ニのみならず、

一、創學悉曇章（三百頌）（大体悉曇十八章の如きもの）

二、<sup>スートラ</sup>蘇咀囉（Sūtra）即ちパー＝ニの語法書（一千頌）

三、<sup>ダーツパタ</sup>駄覩章（Dhātupāṭha）語根篇（一千頌）

四、<sup>キラ</sup>三業擣章 1. 額瑟吒駄覩（Aṣṭadhātu）（一千頌）

2. 文荼（Maṇḍa or Muṇḍa）（一千頌）

3. 鄔拏地（Uṇādi）（一千頌）

五、<sup>カーシカーヴリツタイ</sup>苾芻底蘇咀囉（Vṛtti-sūtra）（一萬八千頌）

六、<sup>マハーバーシヤ</sup>苾芻底蘇咀囉議釋（Cūrṇi）（二萬四千頌）

七、伐致呵利論 (Bhartṛhari Śāstra) (二萬五千頌)

八、薄迦論 (Vākyapadīya) (七百頌)

九、韋拏 (Paiṇṇa?) (三千頌)

以上九種の聲明論書を列示し、且つ簡要なる解説を附して述べてゐます。それによつて印度の児童（と云つても勿論再生族に属する上層三階級特に婆羅門階級を中心としたものであらうが）が八歳に達した時から二十三歳までの十五年間に第一の創學悉曇章から第六のバタンチャリチュールニの朱爾（即ちマハーバーシャ）までを順次に、暗誦し學修してゆく階程が明らかにされ、印度に於ける當時の梵語學の實際を知る事が出来る譯であります。七から九までのバルトリハリの論著に就ては別に就學年齢と履修年限の規定を與へてゐないところを見ますと、1. 隨意科目であるか、2. 或はオースドキシカル正統的な教科書と見做されてゐなかつたか、3. 或は内容が言語哲學的なものであるために、特殊な學派に属する人とか一部の専門家の學ぶものとされてゐたか、その孰れかでなければなりません。これを逆に申せば第一から第六まで即ち字母表とパーニニパーニニ語法書及び語根篇、その附録とも見るべき三樂擢章、ジャヤアーディティヤと、（義淨は名を擧げてゐないが、この書の第六から第八巻までの後半の作者とされる）ヴァーマナとの共著たるカーシカーヅリッティ、義淨ではヅリッティストラとなつてゐます、更に「朱爾」は「マハーバーシャ」のことですが、以上の六種の語法書は凡てパーニニを中心とする一聯の緊密不可分シリーズの叢書でありますから、古來パーニニの完全なる解釋には、その孰れを缺いても不可とせられてゐた事が推定される譯であります。しかして、印度に於ては言語の典範は常に婆羅門の言語に存し、その婆羅門階級に於ける正統的な語法書としてパーニニの權威は殆ど絶對視されてゐたと申して過言ではありませんから、義淨三藏は、佛教徒たるにも拘らず、特に正統的な西方學法を紹介したものと解し得るのであります。義淨渡印の當時に於て、教養ある一般階級に、パーニニの語法書が相當普遍的に熟知せられてゐなければ、義淨はカータントラ文典とか、チャンドラ文典とかパーニニよりも容易に理解し得て、しかも佛教徒に比較的因縁の多い語法書を差措いて、かくも丁寧で紹介する筈がないと思ふのであります。

尙、以上九種の中、三樂擢章に属するアスクダーツ額瑟駄觀、マンダ文荼は題名通りのものは現存せず、又バルトリハリの三種の著作の中でも第七のシャーストラの一部と思はれるものはガナパティシャーストリー氏とレヴィ氏が報告してゐますし、(Winternitz Gesch. d. Ind. Litt. Bd. III S.395. Anm) ヴァーキャパディーヤは現存してゐるが、韋拏と呼ばれるものが何であるかはまだ確定して居りません。高楠先生はビュラーの指示に従つてそれを Beḍa (船) と見 Beḍavṛtti と云ふことに音譯しましたが、どうもそんな言葉はどの字書にも見當らず、第一明らかに Pei-na と讀める

ものを Beḍa 乃至 Veda と見ることに無理があり、従ひ兼ねます (Takakusu, I-tsing, p. 180; p. 225) 田中於菟彌氏は「印度文學思想」(東洋思潮第一冊)の中でヴァーキャパディーヤの第三篇の名稱 Prakīṇaka (雜錄篇)を別に出したものだらうとし、羣孥はプラキールナカのプラークリット化した形 Painṇa であるとしてゐますが、ヴァーキャパディーヤは御承知の如く、嚴格なる梵語の語法に基ける語法學の奥儀書の如きものであり、その題名にプラークリット語の使用は可笑しいと思はれます。義淨が何か又聞きによつて引用したとか、又プラークリット化せる所謂「パインナ」が實在するとかゞ證明されぬ限り、どうもこれも納得し得ないのでありますが、姑く疑問を付して置きます。

さて義淨三藏が梵語を學ぶに當つてパーニニを學んだか否かの問題は、玄奘の場合の如く廻りくどい方法を以つて、しかも不得要領に終りましたのとは異り、比較的確實な推定が出來さうであります。先づ第一の根據として西方學法に於ける語法書の列舉法や説明が極めて具体的で、且つ學習の順序が正確に記述されてゐること、第二に闍耶陁底所造の<sup>ジヤヤアアライア</sup>苾栗底蘇咀羅<sup>グリツタイストラ</sup>(即ち我々の言ふカーシカーヴリッティ)に就て、次の一文がよき根據となること、即ち

五=ハ苾栗底蘇咀羅ト謂フ。即チ是レ、前蘇咀羅(パーニニのストトラを指す)ノ釋ナリ。上古=釋ヲ作ルソノ<sup>マコト</sup>類定=多シ、中=於テ妙ナルモノ十八千頌アリ、ソノ經本ヲ演ズルヤ、<sup>ツマビ</sup>詳ラカ=衆義ヲ談ジ實中ノ規矩ヲ盡シ天人ノ軌則ヲ極ム、十五ノ童子五歲ニシテ方=解スベシ、神州(即ち支那)ノ人モシ西方=向ヒ學問ヲ求メバ、スベカラク此ヲ知ルヲ要シ(然ルノチ)餘ヲ習フ可シ、ソノ然ラザルガ如キハ空シク自カラ勞スルノミ……(中略)……是シ學士闍耶陁底ノ造ルトコロ、其人ノ器量弘深文彩秀發ニシテ云々……(下略)。

と極力カーシカーヴリッティを讚美し、この語法書に就いて梵語を學ぶべきことをすゝめてゐます。更にパーニニ=獨特の十羅聲(動詞の十種の法)を知つてゐること。パタンヂャリのマハーバーシャにも言及せることをも考慮に入れて、義淨はパーニニをカーシカーヴリッティの解釋とともに學んだ事が推定に難くないのであります。

尙義淨の今一つの著である「求法高僧傳」によりますと、義淨の梵語學修は咸亨二年の十二月から同三年の五月まで室利佛逝國(Śrībhoja)即ちスマトラのパレンバンに滞在中に或る程度進み、翌年の二月カルカッタとベンガル灣をつなぐフーグリ河口にあるタムルク當時の耽摩立底國(Tāmrālipti)に上陸、そこで「留住一載梵語ヲ學ビ聲論ヲ習フ」たのでありますが、三十九才から五十一才まで十三年間の印度留錫中には勿論種々の語法書にも接したでありませうが、それに就ての委しい記録はございませんから、それ以上のことは判りませぬ。

## 【結 語】

以上、「魏譯十卷楞伽」に於ける「パー＝」の言及を發端といたしまして、西紀七世紀に於ける玄奘義淨兩三藏が、パー＝の名稱、傳説、語法書に就いて東洋に紹介しました顛末、並びにこの兩三藏がパー＝を果してどの程度に知つてゐたかと云ふ點につき、甚だ雜駁ではありますが、概觀した次第であります。

最後に一言感想を述べることを許して頂けますなれば、中國に於ける佛教東漸以來その弘通を聖願とせる幾多の高僧による譯經事業と、それに必然的に相伴ふ梵語の研修は、唐代に至つてその頂點に達し、東洋人の中から玄奘義淨の如き梵語の大家が生れるに至りましたことは、平素我々も深く感銘するところでございますが、たゞ翻つて残念に思ひますのは、これら梵語學の大家が、後進のために梵語語法書を著して原典による佛典解讀の道を拓いて置かれなかつたために、極く近代まで殆ど漢譯佛典による佛教研究に終始してをり、その間僅かに智廣の字記とか義淨の千字文とか、大藏經に散在する零細な梵語知識の寄せ集めによつて、所謂「悉曇學」なるものが、細々と梵語研究史の命脈を保持して來たと云ふ状態であります。

眞諦三藏が外道の書である「金七十論」を譯して置いてくれましたことが、印度學を裨益すること大でありました如く、玄奘や義淨がパー＝の語法書やカーンカーヴリッティを譯して置いてくれましたならば、東洋梵語學の基礎は既に西紀七世紀以來確立され、それが我國に渡來すれば佛教の内相も外相も、もつとニュアンスの異つたものになつたであらうし、慈雲尊者の如き稀にみる英才を抱き乍ら、語法が判らぬばかりに、あの様に無駄な骨折りをされた遺憾さも、見ずに済んだことでありませう。

明治に至つて、日本の佛教學と印度學が世界の學界に登場しまして以來も、語學の點では常に立ち遅れをつづけてまゐりました。一方ヨーロッパの學界はギリシャ、ラテンの古典學に於て鍛へ上げた語學的手腕を以つて梵語原典を鮮かに處理して、遂に梵語學中心に科學的な印度學を確立し、比較言語學、比較神話學、比較民族學、比較法學、比較何々學と、印度學の確立を契機として雄大なスケールをもつ學問の領域を十九世紀以來展開する事が出來ましたのも、元をたただせば梵語學の優位が原因であり、その梵語學を確立するためにはこのパー＝の語法書が極めて重要な役割を果したのであります。

今日、日本に於てパー＝原典の研究に着手しますには、どうしても一世紀半に垂んとする歐米及び近代印度に於けるパー＝研究の成果に依存する他はないのであります。

東洋の悉曇學はたゞパー＝の名を紹介したに止り、實質的研究史は印度及び西洋に仰がねばなりません。この點への反省の一助にもなれかしと、私は敢て玄奘義淨によるパー＝を紹介を検討した次第であります。